

新 おおさか KEYワード【第19回】

燃えさかる生命の炎 新しい時代の精神を古い台座に盛る

人間は過去を振り返ることで、現代を生き、未来を模索する。たとえばこの12月は、昭和16(1941)年12月8日、ハワイの真珠湾を日本軍が奇襲攻撃し、太平洋戦争が勃発してから80年を迎える。

それを思いながら、戦争で数奇な運命をたどったモニュメントを紹介したい。大阪大学吹田キャンパスの医学系研究科の前にある《巨美不滅》の碑である。中之島にあった大阪大学医学部に置かれていたもので、医学部の移転で吹田に移設された。医学部跡地には来年、大阪中之島美術館が開館する。

表紙の写真を見て、彫刻と台座のスタイルに造形的な違和感を覚えないうだろうか。幾層にも石を重ねた重厚なデザインの台座だが、彫刻は炎を模した抽象彫刻であり、異質なものがつなぎ合わされた感じがする。

モニュメント誕生のいきさつは複雑である。本来、台座の上には、彫刻家・斎藤素巖が制作した医学者の佐多愛彦(1871~1950)の立像があった。今年、大阪大学は開学90年を迎えたが、開学に尽力したのが府立大阪医科大学学長の佐多であり、その功績で銅像が置かれたのである。

しかし、昭和16年に金属類回収令が発布され、いわゆる戦時下の金属供出で《佐多愛彦像》は撤去された。人の命を救う医学者の像が、人の命を奪う武器に転用されるのは理不尽な話だが、大阪市中央公会堂屋根にあったミネルヴァとメルキュールの神像も、金属供出で失われている(現在のものは復元像)。

戦争終結で平和が戻ったとき、医学部構内にポツンと残る石の台座を見て嘆く人たちもいただろう。昭和35(1960)年に新しく《巨美不滅》が制作されることになる。台座の銘板には次のように記された。

「この台座にはもと斎藤素巖氏製作の佐多先生像があったが、大戦に出陣したので、先生縁の校歌「関の以西に巨火あり不滅」から取って、不滅の巨火をあげて先生を記念する」

注目すべきが「大戦に出陣した」と刻まれた文言である。銅像は単なる金属の塊りではなく、その人物の業績や徳を称えて造られる。そこには関係者の思いがこめられている。



新海竹蔵作《佐多愛彦胸像》
昭和30(1955)年。大阪大学大学院医学研究科

金属供出を余儀なくされた彫刻では、生きた人間のように「出陣した」という表現が用いられ、九州大学には、校内の銅像が集められ、出征兵士のようにたすき掛けされて行われた出陣式の写真が残されている。

一方《巨美不滅》の由来となった校歌「関の以西に巨火あり不滅」には、緒方洪庵はじめ大阪の医学への自負が感じられるし、炎の彫刻には、戦争で失われた生命への追悼と、現在から未来に救うべき生命への思いが象徴的に表現されているのだろう。

私の仮説だが、台座に全身像を再制作しなかったのは、大阪大学では昭和30(1955)年に佐多愛彦の胸像が制作されており、あえて佐多像を再現せず、古い器(台座)に新しい時代精神(抽象彫刻)を盛ったというべきか、燃えさかる生命の炎によって、医学の理念を彫刻にしたと考えられる。銘文の最後には、除幕式のことも記される。

“一九六〇年 卒業式の前夜、巨火を焚いて除幕す”

情景が映画の場面のように浮かんできそうだ。このとき卒業して医療の道に巣立った学生たちも、新しいモニュメントの理念に叱咤激励されただろう。

制作者の彫刻家・松岡卓(1923~2008)は大阪出身で、東京美術学校(現・東京藝術大学)に学んだ。堂島川にある中之島ガーデンブリッジの《そよかぜ》(1990年)もその作品である。また、松岡が属した行動美術協会は、昭和33(1958)年中之島に開館したフェスティバルホール外壁の陶板壁画《牧神、音楽を楽しむの図》を制作している。

《巨美不滅》は、大阪市の戦前戦後を生きた医学関係者の思いを伝える記念碑であり、大阪万博開催まであと10年となった昭和30年代、未来を意識した立体造形である。大阪市民の記憶に残し伝えたいモニュメントである。



中之島ガーデンブリッジにある松岡卓《そよかぜ》
平成2(1990)年。(京阪中之島線「大江橋」1番出口)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大分イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現象—』(創元社)など。